

柿田川の湧水とともに 歩んだ人生

国の天然記念物に指定されている柿田川は、日本を代表する清流。その保護活動に生涯をささげてきた公益財団法人「柿田川みどりのトラスト」は、ふじさんネットワーク主催の柿田川自然観察会の開催にも協力して下さっています。その会を代表して、漆畑信昭会長に、これまでの経緯と将来の夢について語っていただきました。



公益財団法人 柿田川みどりのトラスト 漆畑信昭会長

社会の見方が変わった40年

富士山に降り注ぐ雨や雪は、伏流水となつて麓にある溶岩の裂け目から湧水として現れます。駿東郡清水町を流れる柿田川は、その湧水群の中でも最大規模であり、日本を代表する清流として知られています。私

が柿田川自然保護の会を立ち上げたのは昭和50年です。当時は川を保護するというのが社会になく、国や自治体に協力を要請しても、ほぼ門前払いでした。そこでミシマバイカモ（水草）の保護活動、水質調査、自然観察会などと並行して、大型商業施設やクレソン栽培業者の撤退要請などを続けた結果、柿田川の湧水群が『21世紀に残したい日本の自然100選』（1983年朝日新聞社）や『名水100選』（1985年環境省）に選ばれ、社会の見方が大きく変わりました。しかし、その後も不動産会社による周辺環境の破壊が続いたため、保全に必要な土地を買い上げ、あるいは借り上げて保存・

管理を行うトラスト委員会を昭和63年に立ち上げました。委員会発足から3年後には全国から約6800万円の募金が集まり、地主の好意もあつて約2000㎡の土地を取得することができました。

平成3年、トラスト委員会は財団法人「柿田川みどりのトラスト」となり、土地の買い上げ以外に募金は柿田川を地下水汚染や枯渇から守り、その特殊な自然環境を保全する事業に使われることになりました。現在は水源涵養林を育成するための植樹や、外来植物の抜草などの保全活動に加え、一般市民の意識高揚を図るために自然観察会、自然学習会、清掃活動なども実施しています。

ゴールは活動が不要になること

柿田川に対する社会の意識は大き

く変わりました。今や柿田川の自然保護活動は全国的に知られていますが、海外に比べると環境への意識はまだまだ低いと言わざるを得ません。気持ちは育っていますが、実際に行動するボランティアの数は足りていないのが実情です。また、柿田川には年間約50万人の観光客が訪れています。観光と環境を両立させる仕組みづくりも、行政や企業とともに進めていく必要があります。その意味で、財団の活動はこれからも続きます。最終的なゴールは富士山や柿田川に対する社会の環境意識が大きく変わること。言い換えれば、私たち「柿田川みどりのトラスト」の活動が不要になる社会を実現することを目指しています。



外来植物の除去、抜草作業。活動は官民が協力して行われています。



国の天然記念物・柿田川。富士山の伏流水が湧水群から溢れ出し、川幅40~100m、長さ1.2kmの清流となって狩野川へ注いでいます。

漆畑 信昭氏 うるしばた のおあき

プロフィール

1936 駿東郡清水町（昭和11）年生まれ。クラーク博士に憧れ北海道大学に入学。卒業後は大手水産会社に就職し、全世界を航海。海外赴任中に故郷・柿田川への思いが募り、1975年「柿田川自然保護の会」を設立。柿田川の名を全国に広めたキーパーソン。現在も公益財団法人「柿田川みどりのトラスト」会長として自然保護活動の先頭に立つ。

上_トラストの募金活動によって取得した土地。2018年12月時点で募金総額は約1億5,400万円、取得地は4,986㎡、借上地は905㎡となっています。下_富士山麓、浅木塚で行われている水源涵養林の植林活動。これまでに延べ約6,500人が約23,500本の植樹をしました。

